



Title	はじめに
Author(s)	朝倉, 利光
Citation	北海道大学電子科学研究所技術部技術研究報告集, 2
Issue Date	1994
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/1450
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000697026.pdf



はじめに

本技術研究報告集は、第2回目の技術部職員の活動成果を収録したものである。

平成3年度より、技術部職員の地位の向上とその存在意義の明確化をめざして、技術部が設置された。それとほぼ同時に、研究所は全体の組織運営の抜本的な見直しと将来像を模索して、平成4年度より応用電気研究所は電子科学に関する学理及びその応用の研究を目的とする電子科学研究所に改組・転換した。これらは、まさに現代における科学技術の大幅な進展・変革に伴ない、研究所全体の見直しと将来への大きな飛躍への期待を込めて行なわれてきたものである。

1970年以降の現代技術は、それ以前の近代技術と二つの面で質的に異なっている。一つは科学との関係である。近代技術はまず科学があって、その応用として技術があるという科学先行型であった。しかし、現代技術はむしろ技術が科学に対して先行している。科学の論理よりも最適性や効率が追求され、そのための体系的な手法が要求される、いわゆる技術先行型となっている。現代技術のもう一つの面は、情報の機械化をめざしていることである。近代技術は、エネルギー利用の機械化を行なってきたが、情報利用の機械化には大幅に遅れをとってきた。現代技術は、まさに情報の獲得、伝達、適用の全ての機械化をしようとしている。現代技術は、近代技術に基づいているものの、最適性や効率の追求や、そのための情報の機械化をめざすシステム技術となっており、近代技術と決定的に異なっている。

現代は、まさに情報革命に伴なう技術革新の時代である。現代技術は、近代技術のエネルギーの機械化に加えて情報の機械化を実現しようとしている。このような背景を考慮した場合、研究所における技術部の重要性は今までに例を見ないほど増してきている。この責務をはたすためには、技術部職員の益々の研鑽が不可欠である。そのために、当研究所の技術部職員は常日頃技術の研鑽に励んできている。その方向での第2回の専門研修が実行され、期待以上の成果が生まれている。その成果の一部が本技術研究報告である。このような成果報告集の将来へ向っての集大成こそ、研究所の大きな発展に結びついて行くものと確信している。本報告集に対して、学内外からの御批判を頂ければ幸いである。

北海道大学電子科学研究所長

朝倉利光